

漂流する歴史学

— 科学的事証的歴史学批判 —

伊 東 利 勝

はじめに

漂流する歴史学という非常に挑発的な題を掲げましたが、副題を科学的事証的歴史学批判としておりますように、歴史学研究のあり方を問い直すというものです。あるべき社会を構想するための学問研究という観点から、歴史学という学問体系に内在する問題点をえぐりだし、今後のあり方を考えてみたいと思っております。その過程で、今回新たに立ち上げた世界史学専攻の意義についても触れるつもりです。ただここでとりあげます物事の認識にかかわる問題は、歴史学だけではなく、文化人類学とか社会学とか地理学とか、文学にもかかわります。つまり現在の人文学全体を批判するような、そういう話になろうかと思えます。幸い歴史学者のみならず、イギリス文学、ドイツ文学、フラ

ンス文学を専攻しておられる先生もご出席ですので、後ほど、いろいろご意見を賜りたく存じております。

Ⅰ 二つの「元禄赤穂事件」像

元禄赤穂事件といわれるものを題材にして、話を始めさせていただきます。我われの世代では、忠臣蔵として知られているこの元禄赤穂事件は、元禄一五年の十二月一日（一七〇三年一月三十一日）の弘暁、赤穂藩の旧藩士四七人が、江戸の本所、吉良邸に討ち入る。そして、高家筆頭、すなわち儀典を司る役職にあった吉良上野介義央が殺害されます。ここで四七人ではなく、四六人であった、またこれをすべて旧藩士としてよいか、さらには討ち入りではなく、「侵入」もしくは「襲撃」と表現すべきという問題がありますが、今は深く立ち入りません。

この背景としては、元禄一四年の三月一四日に江戸城内の松の廊下で、赤穂藩主の浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に対して、刃傷に及んだということがあります。いわゆる松の廊下事件ですが、加害者である内匠頭は即日切腹、被害者の上野介にはお咎めなしという、公儀の裁定が下ったわけです。これに不満を持った、大石内蔵助良雄はじめ赤穂藩士が、主君の無念を晴らすために、いま申し上げましたような行動に出たといわれております。

この事件については、古くは仮名手本忠臣蔵という芝居や、映画、テレビ等でよく知られています。ただ最近の若い人たちにはあまり馴染みがないようで、愛大の学生諸君にきいても、この話を知っている者は百人中数人しかいません。それは忠臣蔵がテレビドラマや芝居であまり取りあげられなくなり、たとえそうであっても主君の敵討ちとか、主君の恩に報いるとかいうモチーフを前面に出されなくなったからだと思います。個人的には好ましい傾向であると

思いますが、ともあれこの話の中で大石内蔵助はじめ赤穂浪士は英雄、上野介やその配下の者は、成敗されてしかるべき悪人として扱われています。世間は、上野介の貪欲さ、邪悪さに業を煮やし、内匠頭の純粹で真っ直ぐなおこないに共感し、赤穂浪士が苦難に耐える姿に涙を流し、そして所願を成就し義に殉じる姿に、今流にいえば元気をもらいました。単なる作り話ではなく、史実にもとづいているということが、これを迫力あるものになっています。

ところが、これとまったく反対の歴史を伝えている場所があります。実は我が豊橋から非常に近い所にあります。地図を見ますと、豊橋から海沿いに、車で四〇分ほど西へ行くと、現在は西尾市になってしまいましたが、吉良という町に着きます。ご承知のように、ここには上野介の領地がありました。合併前の吉良町が出していたパンフレットには、その最初に、「時代にきらめいた五人の男たち」ということで、この町にゆかりのある偉人



図1 吉良町のパンフレットより

が紹介されております（図1）。筆頭に、「お気の毒なお殿さま／吉良上野介義央公／名君の面影をたどる赤馬の怪」ということで、この上野介を取りあげ、

吉良といえば、特に有名なのが「忠臣蔵」の吉良上野介義央公。この界限は、鎌倉時代から江戸時代初期までこの吉良家の領地として発展しました。義央公は、領民から慕われながら非業の死を遂げた名君として、今も多くの人々の記憶の中に静かに生き続けています。

という文章にはじまり、上野介が領地では、庶民が使う農耕用の赤馬にまたがり、「巡回して領民と接し、人々から厚く信頼されていた」こと、塩田開拓や治水など「数々の善政」をおこなったことが記されています。

つまり非常に立派な殿様、領主であったというわけです。それから、このパンフレットには、「赤穂浪士討ち



図2 史跡清水一学の墓の案内板

漂流する歴史学——科学的実証の歴史学批判——



図3 300年記念シンポジウムのポスター

吉良町の中にある字の名前ですが――の陣屋に通った。めきめき上達し、義央公は藤作に目をかけ、一五才で江戸に呼び寄せ、やがて中小姓に取り立てる。赤穂浪士「襲撃」の夜、一学は奮戦して命を落とした、享年二五歳であったと書かれています。この文章からは、道化どころが、青雲の志を抱いた非常にさわやかな少年の姿が目に見えかびます。

二〇〇一年に、吉良上野介没後三百年を記念して、吉良町でシンポジウムが開かれました。図3は、その時のポスターですが、ここには「元禄事件最大の被害者を偲ぶ」と書かれています。忠臣蔵を称して「元禄事件」とし、赤穂の文字がはいっておりません。元禄赤穂事件とすると、忠臣蔵の語りに引っ張られてしまうという思いがあるからでしょうか。この没後三百年記念行事として、吉良町では、生涯学習の一環として、「「名君の証」――吉良を知る――」というテーマの県民大学講座も開講しています。全六回でその趣旨は「吉良公が残したものにふれながら名君の一面をあきらかにしていきます」ということです。上野介にかかわる歴史や菩提寺、ゆかりの品を現地に赴いて実見し、これを説明することによって、いかに名君であったかを、「証明」しようという試みであったと思われます（図4）。

このような語りは、吉良の随所に認められます。吉良家の菩提寺である華蔵寺にはりっぱな経堂がありますが、その縁起を記した案内板には「この経蔵は、吉良さん（上野介義央公）が領地の安寧と領民の幸福を祈願して、建てられたものです。時に元禄十三年（一七〇〇）吉良さん六〇歳でした。華蔵寺への最後の喜捨になりました」とあります。立派な領主であったことがうかがえます。ちなみにこの案内板は一九九七年に作成されています。また同じく境内に、村上鬼城の「行春や憎まれながら三百年」という句を説明した案内板があります（図5）。大正七年四月、鬼城はここ華蔵寺に詣で、画帖にこの句をしたためたことを紹介し、「おきのどくな吉良様、三〇〇年もの間、世間では憎まれなされた。あんなに名君でありながら・・・」と解説されています。

そして極め付けは、同じく華藏寺の境内にドーンとそびえる、畳一枚の広さを越える石碑です(図6)。ここには「真実を求めて」と題して、世にいう忠臣蔵とは真逆の認識がしめされております。まず「人を切る刀はあっても、時の流れを断ち切る刀はないといわれる如く」という言葉にはじまり、「元禄時代に吉良義央公と浅野長矩公との間に不和を生じ、その処理に冷静さを欠き、御殿で浅野公が刃傷に及んだ事から、幕府の掟に触れ、家は断絶、身は切腹という事になった」という説明が続きます。そして赤穂の再興はならず「旧臣たちは禄を離れることになり、一か八かで吉良公を討ちとったが、当時の学者が協議して、赤穂浪士に切腹を命じた」。それは「吉良公は、治水等の功績が大で、評判のよい名君であったからである」とする。そして、これが忠臣蔵としての広まるのは「名君を暗殺したものを忠臣としたの

漂流する歴史学 ―科学的実証的歴史学批判―

県民大学講座

◎生涯学習課 生涯学習部 電話32-1111 内線425

「名君の謎」―吉良を知る―

※定員 一回 40人(席数の方も受限できます。)
 ※受講料 1: 000円
 ※講 師 吉良町文化振興会委員長 矢野紀雄氏ほか
 ※抽 選 申込者多数の場合は抽選を行います。
 ※吉良公が鎮したものにふれながら名君の一瞥を覗かれています。二の講義で、みなさん「吉良さん」に近づいてみませんか?

回	題 目	時 間	内 容	会 場
1	平成13年10月20日(土)	13:30~15:30	吉良氏との出会い	吉良町生涯学習センター
2	平成13年10月27日(土)	13:30~15:30	原島城跡	原島城跡
3	平成13年11月3日(土)	13:30~15:30	成徳寺と徳慶寺	成徳寺 成徳寺
4	平成13年11月10日(土)	13:30~15:30	吉良さん(徳島分)三徳神社	徳島分
5	平成13年11月17日(土)	13:30~15:30	吉良さん(徳島分)の宝物	徳島分 徳島分
6	平成13年11月24日(土)	13:30~15:30	吉良の「謎」	吉良町生涯学習センター

■ 申し込み方法 ■

・吉良町公民館へ付付の「県民大学講座申込書」に必要事項を記入のうえお申し込みください。
 ・受付期間は9月8日から10月5日までです。



図4 吉良町教育委員会『いま、生涯学習2001年 生涯学習ガイドブック ―後期講座―』8頁。

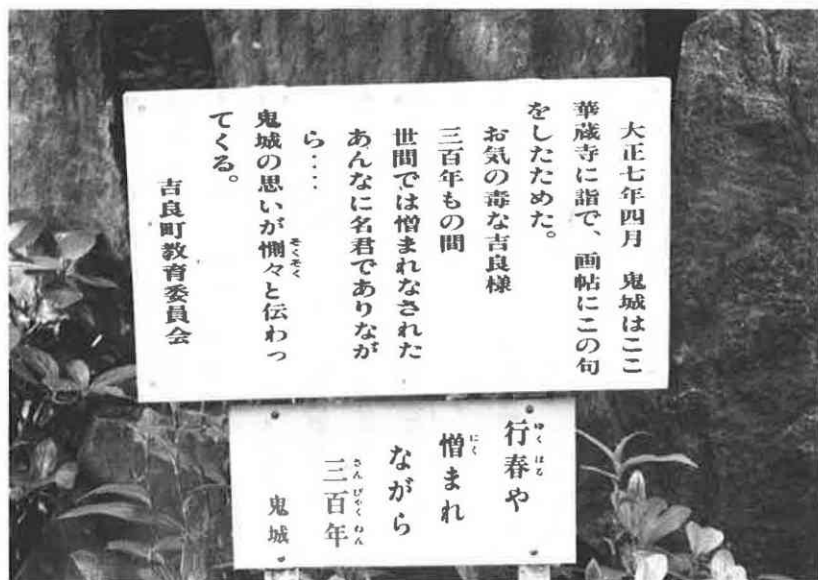


図5 華蔵寺にある鬼城の句碑



図6 華蔵寺境内にある「真実を求めて」の碑

では、武士道にも反し、芝居にもならないので、小説家、劇作家たちが、興味本位にいろいろのつくりごとをして、吉良公を極悪人に仕立て上げた」結果であるということです。

次に、この文の起草者の見解が示され、「日常交際のイザコザを、殺し合いで解決したのでは、人間としてもっとも恥ずべきであり、世の中が殺伐となる。お互いが腸のにえくりかえるような事があっても、どちらかが「汝の敵を許す」といった人類愛に目ざめたなら、世の中は明朗となる」。つまり日常生活の中で生じる行き違いや争いは、話し合いや、慈悲の心をもってこれに当るべきであるという。けっきょく、浅野内匠頭や赤穂浪士は、「人間として最も恥ずべき」人だということになるわけです。しかしそんなことは昔のことで、「現在吉良と赤穂の人々は、お互いの恩讐をのり越えて交歓しているが、これは喜ばしい限り」であるとして、「もろもろの、恨みつらみを、泡と消し」て行こうという、未来への展望も示されています。ただこの石碑を建てたのは「ここに吉良公遺徳の一端を述べ、世の誤解を解き、霊のやすらかならん事を心から希うものである」と結ばれているように、忠臣蔵への異議申し立てであります。つまりあれは、作り話で、ここに書いてあるのが「真実」だというわけです。

昭和十一年一二月に、この文を起草し、石碑を建てた大竹仙松という人物は、吉良の出身で、横浜に出て倉庫業で財を成した人だそうです。自分の故郷が日本中で貶められていることに心を痛めていたのでしょう。故郷の復権を願うことで、つまり吉良の地に、強い愛着を有していたことが分かります。歴史とアイデンティティの間に深い関係があることがよくわかりますが、この石碑には、現在吉良町民と赤穂市民とは、「恩讐をのり越えて」、交流しているということが書かれておりました。調べてみますと、昭和三三（一九五八）年に吉良町の青年団が赤穂を訪問するということが、先ずおこなわれたようです。そこで大歓迎を受ける。ホームステイをして、いろいろな交歓会に出席す

る。するとこれを受けて翌年、赤穂の青年団が吉良町を、返礼親善訪問をする。ここでもやっぱり大歓迎を受け、ホームステイをして、ということがあり、その後昭和三十六年にまた吉良町から赤穂を訪問してというように、両者の間で親密な交歓が実現したようです（鈴木悦道一九九九）。しかしその後疎遠になったようですが、平成元（一九八九）年に、赤穂市の呼びかけにより実現した「忠臣蔵サミット」を機に、「松の廊下の元禄事件以降、交流のなかった吉良町と赤穂市ですが、平成二年に東京都墨田区長の仲介により「復縁」ができた」（吉良町ホームページ）、吉良町も平成五年からはこのサミットに加盟しているそうです。

問題は、この交流や「復縁」です。あの時はこうであったという、同じストーリーが吉良と赤穂の間で出来上がった時に和解が成立するわけですが、本当に両者の間で、ひとつのストーリーが成立したのでしょうか。たぶん、私は、そうならないだろうと思います。と申しますの



図7 赤穂大石神社の絵馬

は、まず大竹仙松氏の「石碑」です。これはやはり、浅野内匠頭や赤穂浪士の落ち度を指摘している。片や赤穂側はというと、赤穂市にある大石神社の絵馬(図7)には、とても吉良の人には受け入れられない絵が描いてある。これは私が、二〇年ほど前にこの神社を訪れたとき入手したもので、現在では、制作業者の都合により使用されていないようですが、凛々しい内匠頭の姿に対して、上野介はなんとも惨めたらしい。この絵馬の裏には、右端に「祈願望成就／大石神社 四七義士御神前」とあって、左側の空白部分に、「愛知大学に合格しますように」とか「病気が治りますように」とかを書くことになっていると思います。この絵を見ると吉良の人は、もうちょっと描きようがないかと思わずにはいられないのではないのでしょうか。けっきょく交流はするが、本音のところはどうなっていたのあやしい限りです。もちろん吉良や赤穂に強いアイデンティティを持っている人に限ったことですが。いわゆる歴史認識問題ということになります。

II 科学的実証的歴史学と史料の選択

元禄一五年の一二月一日江戸本所の吉良邸で起こった事件に関し、真逆の歴史が語られていることがわかりました。そしてその違いを決定づけているのは、やはりどのような言葉を使うか、であることもわかります。いうまでもありませんが、歴史は声や文字によって構成されているのです。語りや文書のなかにしか存在しません。「義士」という言葉から忠臣蔵が出てきますし、「名君」や「襲撃」や「暗殺」は暴徒や「人間として最も恥ずべき」人という赤穂浪士像を生み出します。また元禄赤穂事件と呼ぶか、その赤穂は外して、単に元禄事件とするかでも違ってきま

てないということで、 S_1 、 S_3 、 S_6 、 \dots 、 S_n を選び、通説とは違って、上野介の「思いやり深く、温かい人柄がしのばれる」（鈴木悦道）として、名君や暴徒という赤穂浪士像を浮かび上がらせるわけです。かたや義士といい、一方では暴徒という。どちらも譲らない。そうすると必ずといっていいほど、この双方は何れも自らの立場・利害に引き寄せて過去を描き出している、中立ではない、という人が出てきます。歴史は中立的、客観的であらねばならないというところで、吉良にも赤穂にも利害関係を有さない、もっとも「正確」であるという第三の解釈が出てくる。赤穂の方の描き方にも問題があったし、吉良の側もこれへの強い反発が目を曇らせる結果になっているとして、例えば赤穂浪士は「刺客」という言葉で表現したほうがよいとする。

そうすると、ここに「義士」と「暴徒」と「刺客」という三つの歴史像が出てきたわけです。さらには第四の解釈も出てくるかもしれない。そこで問題は、義士が正しいか、暴徒が正しいか、それとも刺客が適切か、はたまた第四の、ということになります。この四者は、それぞれ自分の歴史が正しいと主張します。そして、我われには、その正否を決めることはできません。なぜならいずれも科学的実証的だからです。「刺客」という解釈にしても、 S_1 、 S_2 、 S_3 、 S_4 、 S_5 、 S_6 、 S_7 、 S_8 、 \dots 、 S_n のうちの S_2 、 S_5 、 S_8 、 \dots を使って導き出されて結論であって、その手続きについては赤穂の立場や吉良の方法と何ら違いありません。ちゃんと史料に基づいて、描かれている。つまり近代的歴史学が主張する科学的、実証的手続きを踏んでいるからです。

このように「義士」、「暴徒」、「刺客」あるいは第四の違いが出てくるのは、よくいわれるように、史料に真っ白な気持ちで向き合い、史料の語る言葉に耳を傾けた結果ではありません。史料の選び方、そのつなぎ合わせ方の違いが、こうしたことに結果しているのです。ではなぜ選び方の違いができたのでしょうか。それは、こういうことを描いて

やろうとか、こういう風にもっていきたいという、作為とか意図とかが、史料を取捨選択させているからでしょう。科学的実証の歴史学というのは、史料に基づき、これを科学的に解釈するということを主張しているのであって、史料の選択方法については何も制約を加えておりません。というか制約を加えないということを謳うことによって、客観的とか中立を担保しようとしているのです。そこに結び手の、作為や意図が入ることは避けられないはずなのに、わざわざそうしてはいけないという。これは何故でしょうか。後で述べますが、「実像」や「実体」を明らかにすると書いておけば、その意図や自らの政治性を明らかにする必要がないからです。

さらに問題があります。これまで、S₁からS₁₀までが、いわゆる事実をあらわしているという前提で、話を進めてきました。これにはありのままの現実が写し取られていて、作為やある立場からの解釈など入っていない、つまり史料批判がなされ、疑わしき語句や叙述は排除されているということで考えを進めてきました。近代の歴史学にとって、この史料批判というのは必須で、たとえ同時代に書かれ、記録されたものであっても、そこには書き手の意図や荒唐無稽な話が入り込んでいるので、これは科学のメスによって除外し、そこに残った客観的事実のみが、歴史の史料になりうるというものです。しかし、そのようなことが可能でしょうか。

歴史的資料つまり史料に内在する問題については、フェミニズムの側からの鋭い批判があります（上野千鶴子一九九七）。一九九一年韓国で、元日本軍従軍慰安婦であったキムハクスンさんがカムアウトされました。それまで従軍慰安婦であったという自分の過去を隠して生きてきたが、よく考えてみると、これを恥と思う必要はない、なぜなら日本軍や政府によって強制された結果であり、自分は被害者であると。人に顔向けできないことを強制し、自分の人生を台無しにしたことを日本政府は認め、謝罪し補償して欲しいということです。つまり人間としての尊厳の回復を

求めての行動を起こされたのです。

これを受けて問題になったのが、軍の強制なり政府の関与なりを証明する根拠です。日本軍によって強制されたという「事実」については、証言だけでは信用できない、文書史料で証明せよと、いうわけです。証言には、話し手の記憶違いや作為が混入する、また語る相手によってその内容が違ったりするので当てにならない。しかし文書には、これがないので確実な証拠とすることができると。元従軍慰安婦の訴えや窮状に同調・同情し、その側に立って論陣を張った良心的歴史学者も、これ裏付ける文書史料が存在しないということと、その舌鋒がにぶるということがありました。確かに実証的歴史学からすれば、確実な文書史料がなければ、そうした事実が存在したことを明らかにしえない。慰安所において性奴隷状態に置かれたことをもって、これを日本軍の強制とせざるをえず、慰安婦として強制的に徴用することが制度的に存在したことは、証明できないとしました。

この時、フェミニズムの側からの反応は、こうでした。確かに証言には、話し手の意図や作為が入り込む。しかし文書史料も、また然り。その中に意図や作為が混入しているということでは何ら変わらない。文字史料は、ある現実を写しとった結果の産物であり、その時点で写しとった人間の考え方がそこに入る。同じこと見ても、Aという人間が書いたものとBが書いたのが全く同じということは有りえない。また何を書き留め、何を無視するかも、人それぞれで、社会的立場やその状況によって異なる。その時の現実をそっくり描写することなど不可能である。さらにこれを現在われわれが利用できるということは、それが人の手によって残されてきたからである。重要である、重要でないという選別を受けた結果とせざるをえない。これは残しておく、後々まずいということとで、焼却される場合もあった。しかもこれが、公的な文書館や図書館にはいるか、そうでないかでまた選別される。同じく史料集に収められる

かそうでないかで、利用のされ方は違ってくるが、これは編纂者の一存による。

従って、現在我われが利用できる文書史料は、幾重にも人の手を経てきたものであって、そこには様々な人間の、様々な意図が混入しているといわざるをえない。そういう意味で、証言と同じである。人々が混入しているというところに変わりはない、と。確かにいわれてみれば、ごもっともなことです。よく考えれば、スペキュレーションの入っていない文字史料など、ないということになります。例えば、これは架空の話ですが、日本の新聞に

昨日のヤンキース戦で、イチローは待望のホームランを放ち全米を唸らせました。

という記事が載っていたとします。百年後にこの記事を見て、歴史学者がテキスト・クリティクをやったとしましょう。つまりこの文章から事実だけを取り出して、それを客観的な史料として使うためにです。

そうするとこの文で、どこが取り除かれていくかというと、つまり書き手のスペキュレーションの入ったところはないと、ひとつは「待望の」というのがあると 생각합니다。「待望のホームランを放つ」というのは、この記者がそう思っていただけで、相手方はそんなことは考えていない。従って客観性に欠ける。それから「全米を唸らせた」というところも。「全米」が唸ったどうか、そんなことは分からないだろうと。しかし、「昨日のヤンキース戦」で「イチローがホームランを打った」という、これは紛れもない事実であって、動かし方がない。これは史実として、中立的なものとして差支えない。普通はこのように考えられると思います。

ところが、この記事にはもうひとつ作為が認められる。どこでしょうか。それは、この記事が書かれ、新聞に掲載

されたということです。つまり無限に連なる人間の営みの中から――これは少々大げさですが――「昨日」アメリカで行なわれた野球の試合の中から、さらには他にも日本人のプレーはあったし、イチローは三振もしているのに、ホームランを打ったことだけを取りあげ、それを新聞に掲載している、その営為です。そうです、この記事は日本のナショナルリズムとか愛国心などという熱い心に届けるために書かれたということが出来ます。中国だとかイギリスだとかフランスの新聞にはこういう記事は載らない。日本の新聞だからこそです。そういう意味でこの「事実」も、無色透明とはいいい難い。こういう文章が後に史料として使われる時には、そもそもこの記事そのものに、日本のナショナルリズムが入り込んでいると見なければなりません。

要は、確かに起こったことはひとつ、かも知れません。しかしそのことが人間によって認識されなければ、それは起こらなかったことと同じです。例えば絶海の孤島で、雨が降ったとしましょう。ここに誰も住んでいなければ、またその降雨に利害を有する者が誰もいなければ、それは降らなかったのと同じです。我われにとって無関係だからです。従って書き留められたということは、それが記述するに足ると判断されたわけで、そこには少なくとも、何らかの理由により書き手にとって、そのことが書き留めるに値すると判断されたからだと思います。どんな文字史料にも、何らかのかたちで意図が混入しているとせざるをえないということです。

そうすると、つまり史料を選択する過程で作為が入るし、その史料そのものにも意図が入っているということになってくると、そういうものをつなぎ合わせて作る歴史というのは無色であったり客観的であったり、誰がみてもそう見えるというものにはならない。これは歴史叙述に限ったことではなく、社会学でも地理学でも同じ問題を孕んでいるのではないでしょう。いろいろなデータを用いての社会像であったり地域像であったりするわけで、ある目的のため

に採られた統計や資料を用いて、これを描き出す。しかもその統計や資料を、ある目的のために取捨選択し、つなぎ合わせるによっておこなう。そこには、描き出すことにどういう意味があるかとか、何故そういうのを描き出すかというような政治性が必ず入り込んでいるわけです。

歴史学者はよく、自分が描き出したものを正統化するために、「実像を描き出す」、「あったように描く」、あれは「こじつけ」、あれは「虚像である」、「でっち上げ」、「色眼鏡をかけている」、「『真実の歴史』」、「偏りのない歴史」などに、「過去を再構成する」、という言葉もよく使います。ひとつの過去があって、今はそれが崩れ去ってバラバラになっている、これをもつ一度つなぎ合わせて、積み直して元通りにするという意味で、再構成することでしょう。つまりこうした言葉の裏には、事実のひとつ、真実はひとつという考え方があります。それは誰が見ても同じように見える、実体としての歴史が存在するという前提に立っているからに他なりません。たしかに人の手をすべて取り去れば、真実の歴史も姿をあらわすかもしれません。しかしそんなことは不可能で、神のみが知る世界でしょう。

先ほど申しましたように、科学的実証的な歴史学の手法を用いても、いろいろな歴史が姿をあらわします。これは歴史がひとつではないからでしょう。にもかかわらず、義士とか忠臣蔵というものが通用し、暴徒であるとか、刺客であるとかが社会の中で一般化されていないのは何故でしょうか。それは、この義士という言葉が、当時の社会を規定していた、儒教的な大義名分論とか君臣論とかに合致していたからだと考えられます。いくつもある言葉の中で、あるものが特権的地位を獲得するのは、当時の社会に受け入れられる、またある場合には、そうなるよう力のある者が公器を使って伝え広めるからでしょう。忠臣蔵の場合は、社会を作り上げている力関係、つまり権力の在り処が、この義士とか忠臣蔵という言葉に特権性を与えている。人形浄瑠璃や歌舞伎の題材として、実名では幕府の御政道に

かわるので、誰でも察しが付くかたちで、取り上げられることが認められ、奨励される。ある言葉や歴史像が選ばれてそれが定着していくことは、そこに当時の権力の構造が反映しているからであるとみることができます。

Ⅲ 国民国家と歴史認識

科学的実証的歴史学が、作為や意図が入らざるをえないのに、入っていない客観的なものであると我われが考えてしまうのは、それについてこの社会では、無自覚でいられるからではないでしょうか。イチローの例で指摘しましたように、私たちはナショナリズムに極めて鈍感です。これを常に意識することなく暮らしているのは、現代社会の動きがその生みの親である国民国家システムによって規定されているからではないでしょうか。この国民国家というのは、西川長夫さんの業績に依拠してお話しさせていただきましたが、単なる国家形態というだけでなく、これを成り立たせるための様々なイデオロギー装置も備えている。これを我われは、身体化しているということです。

国民国家というのは、一八世紀末から特に西ヨーロッパであるとか、アンダーソンなどは南米が発祥の地だとしていますが、それまでの、国王が支配する王国というシステムに変わって、主権は国民にあることによって成り立っている国家です。国境によって領土が区切られ、その中ではすべての制度が一元化されます。王国時代のように場所や地域によって制度が異なるというのではなく、国民はその平等性を担保するため、同一の機構・制度のもとで暮らすことになるわけです。この国民国家という形態は、極めて歴史的なもので、現在これが地球全体を覆っています。もちろん多少の例外はありますが。

国民国家というシステムが形成・維持されるために、国民化プロジェクトなるものが作動します。交通網や通信手段を整備したり、土地制度や租税制度の一元化、貨幣制度も統一されます。租税制度について付け加えますと、そもそも税金というのは、それまで国王や領主が自分の権力を維持するために、住民から経済外的強制の形をとって収奪していたものでした。ところが、国民国家になるとそうはいきません。住民は自分の所得の一部を中央政府に渡すことによって、これが自分たちの生活が円滑に行われるよう支出されることを期待します。同じ額もしくはそれ以上であつても、王国時代のそれとは内容がまったく違うわけです。

また憲法が制定され、国民議会ができる。主権は国民にありますので、これは必要なことです。それに基づく政府が存在し、裁判所、警察署、刑務所、これは治安を維持するため、そして自分たちの国家という共同体を守るために、軍隊が組織される。徴兵制が布かれ、メンバーシップを確立するために、戸籍とか住民登録制度が整備されていく。それに、学校。義務教育は国民国家としてのまとまりを、つまり住民の考え方をひとつにまとめていくためには、なくてはならない制度です。そして博物館も。これは国民の来歴、自分たちの文化というものゝの姿を示すために必要かつ重要な施設です。

国家のシンボルや国民のモットー、国旗、これらはあまた国民国家が存在する中で同じ物はひとつとしてない、全部違う。曆も統一されていく。そして時間。中国は、あれだけ広いのにひとつの時間でやっています。中央集権を徹底するためでしょう。それから国語が作られていく。地方によって違う言語が話されていたものを、ひとつにしていく。国語辞書が作られて、地方によって異なっていた言葉が、標準語や共通語におきかえられる。そして国民文学というのが成立する。芸術もそうですし、建築もある形態が選ばれ、たとえば日本の美、日本建築として特権化されていく

わけです。

国民化プロジェクトの中で、特に重要なもののひとつが修史ではないでしょうか。我が国の歴史はこうであったという、つい二百年前までは国民（民族）なんてなかったのに、時代を可能な限り遡らせ、ずっと昔からあったように、もしくは現在の姿になるべく進んできた、その道のりを創作してゆく。こうしてその古さを誇り、国民に共通の記憶として植え付けつける。これと並行して、地誌編纂を進めます。これは地方の歴史や記念物を調べ上げ、これによって国家の歴史を補強し、ナショナル・ヒストリー（国民の歴史）に収斂させる。また国民の祭典だとか、祝日だとかを設け、国民としての一体感を醸成していくわけです。

国民国家の成立とともに、その相互関係のなかで、文明であるとか文化であるとかの概念が重要な意味をもってきます。自己を誇り、その行動を正統化するために、文明という言葉を使い始めたのはフランスであるとされていますが、ここから周辺の野蛮な国を教化してやらなければならないという発想が生まれます。ところが野蛮とされたドイツは、文明なんでものは、穏やかさとか上品さとか礼節をわきまえているとかのたまっているが、あんなのは腐敗し堕落している、それに引き替え我われは、伝統に基づいた文化というものを持っているという。ここに、文明に対して文化という概念で自分たちの固有性を主張し始めるわけです。後発国の日本もそうでした。一九世紀になって、国民国家の多くが、文明とか文化という概念で、自らの統合をはかってゆくわけです。なお、ここでは取り上げませんが、伝統とか固有の文化とかを強調するあまり、ここに巣くう家父長制の問題が等閑視されたことは指摘しておかねばなりません。

こうして、ひとつの言語、ひとつの歴史、ひとつの文化をもった日本人、中国人、フランス人、ドイツ人という概

念、つまり民族という概念が、国家を単位として次第にできあがっていきます。そして日本人であるとか、イギリス人であるとかフランス人であるとかというのは、ずっと以前から存在していたと考えられるようになるわけです。国民国家というのは、いま述べましたようにどこでも同じような装置で形成されているわけですが、そうであればこそ、その独自性とか優越性とかを主張することにより、他との差別化を図らなければなりません。これは国民に帰属意識を植え付ける必須の方法で、住民にその国民であることに誇りを持ってもらうためです。ところが独自性や誇りは、他との比較の中でしか出てきません。だから国旗であるとか、国名であるとかというものが、どれひとつして同じものはないということになります。

よく日本人も中国人も在日韓国・朝鮮人も、みな平等であるといういい方をします。民族差別を解消するための考え方として、声高に唱えられます。なのに差別はなくなりません。何故でしょうか。それは、この命題が、成り立っていないからです。日本人というのは、中国人や韓国・朝鮮人などの外国人を否定したところに成り立つ概念だからです。否定という強い言葉を使いましたが、あることについては負けているが、これについては我われのところにはないとして、その独自性であるとか、優越性であるとかいうのは必ず主張する。何もないときは日本人も、中国人も平和的にニコニコとやっています。が、歴史認識や領土問題などで利害がぶつかると、必ず敵対関係が生まれ、相手を否定する。問題を棚上げにするか、もしくは相手を屈服させるまで戦うことになります。だから、民族はみな平等などという考え方は、「民族」の来歴からして現実には成り立ちません。

こうなってしまうのは、ひとつには、中国人とか日本人とか、男と女の場合もそうですが、対立項を設けて、これに生物学的説明を与えているからだだと思います。そして日本人とはこのような人種である、中国人はこうした性癖を

有しているという認識の仕方をする。そうでない日本人、違った行動様式の中国人もたくさんいるのに、これは無視するか例外扱いをします。女らしいという言葉にも、こうした思考方法があらわれています。ステレオタイプ化するというのは何時の時代にもあることでしょうが、近代にあつては統計学をはじめとする社会科学や自然科学の手法に基づく知見として、これを実体化していきます。

国民国家システムは、新しい学問分野も生み出しました。ここで問題にしている歴史学や地理学、文化人類学さらには社会学などは、中世にはなかった学問です。先ほど申しましたように、歴史学は民族を生成し自らの来歴を明らかにしてこれを国民に示し、記憶させることにより、帰属意識を強化させようとするためのものです。確かに前近代においても歴史書は存在しておりますが、民衆の歴史とか国民の来歴が書かれたものではありません。そのほとんどが、統治者の出自、施策や行動を取り上げ、これを支配者として正統化するため、もしくはこれに対して教訓を垂れるためのものでした。その社会の姿とか構造とかの変遷を扱ったものではありません。王国や王朝の興亡要因は、すべて支配者の資質に還元されております。

地理学や文化人類学の生成発展も、国民国家の膨張と軌を一にしております。西ヨーロッパ諸国がアメリカ、アジア、アフリカに触手を伸ばす過程で、形成されていきます。未知の世界を効率的に支配するについて、当該地域に暮らす住民の行動様式や産物、生産様式などを、「科学的に」知る必要があつたからです。植民地支配の必要から生まれた学問といつていいかもしれません。もちろん地理学には、祖国の姿を明らかにし、これを視覚化し、国民に伝えるという仕事も与えられました。しかし文化人類学については、自国民がその研究対象となることは極めて稀で、その場合日本では民俗学と称して独自性の探求に向かうのですが、やはり他民族についての研究が中心であつたと思ひ

ます。

これに関連して、国民国家の成立と共に資本主義も広く取り入れられていくことを述べなければなりません。資本主義は、歴史的にみて国民国家の庇護の元に成長してきました。資本が、蓄積され増大していくためには、マーケツトを持たなければならない。それで国家が侵略戦争をおこない、植民地を獲得する。資本の運動から生じる利潤に国家・国民が大きく依存しているからです。王国時代の侵略戦争は、国王が自らの権力維持のため、住民から兵士を徴用するか、もしくは雇用することによって遂行しておりました。しかし国民国家になると、国家のために我が民族のためにということになり、総力戦の様相を呈するわけです。国民が一丸となってこれに当ることになります。

こうしてある国民国家が、資本の運動と一緒にあって世界に広がっていく時、これを支えるため、歴史的には欧米諸国によるアジアやアフリカの植民地支配ということになりますが、オリエンタリズムといわれるものが生み出されます。このオリエンタリズムというのは、アジアを非ヨーロッパとみなし、ヨーロッパにないもの、ヨーロッパが否定するものをアジアとして措定するわけです。アジアの現実がどうなっているかということには、なんら注意が払われません。西ヨーロッパ諸国の先進性、優位性を示すための思考様式といってもよいでしょう。

自分たちのことは、発展、動的、正常、優勢であるとか、人間であれば成人になぞらえ、成熟、有徳、誠実、信実、正確、合理的などという言葉で表現する。ところがアジアやアフリカは、停滞、異常、劣性、子どもじみている、未発達、墮落、不徳、不誠実、虚偽、不正確、情緒的、無能力、未開、野蛮、それから優しさ、献身、女性、というような言葉で表象するわけです。さらには性的魅力、神秘的、再生、母、精神、こういうのも使われます。さらに現代にあっては、独裁、民主化、人権などという言葉で、アジアの社会が論じられます。

特に最近、マスコミを賑わしたミャンマーなどは、民主化や開国へ向けて、もの凄い圧力がかけられてきました。人権とか民主主義とかいって、けっきょくは資本が動きやすい環境を整えるようとしているにすぎません。イラクやアフガニスタンを爆撃したりするのも、同じことです。オリエンタリズムでいけば、付随的に住民へ被害が及んでも、これは仕方の無いことであると割り切れます。住民の生活を守るため、彼らに真の幸福をもたらすため、平和の為に差し当たり、多少の血が流れるのは仕方がないとして、心の痛みなど全然感じないわけです。なぜならアジアやアフリカの住民一般を、これに自分たちにとっての負のイメージを押し付けることにより、救い教化すべき対象としてしか見ていないからです。

つまり自分たちは正義の味方であり、良い事をしていると、思っているのでしょう。そう思わなければ、余所の国を爆撃したり、経済制裁したりすることなどできません。民主化し、市場や競争原理を導入することにより、改革を推し進める必要がある、それには傷みが伴う、という論理です。先進国のなかにあっても、無駄を省き、効率のよい社会をつくるためには、多少の犠牲や痛みはともなうという考え方です。けっきょく、普遍的原理としての、自由とか、平等とか、平和とか、効率というものを実現する為に振るう暴力というのは、それを暴力とみなさない。ウォーラーステインは、暴力の暴力性を消去するのに、この普遍主義が使われるといっています。

以上のようなメカニズムを有する国民国家システムが支配的な現代世界にあって、歴史を研究するということは、どうということかということになります。特に私のように外国の歴史を研究する場合に限って言えば、大きな落とし穴が待ち受けていると感じざるをえません。ミャンマーの歴史はこうだ、イギリス文化の特色はこれだ、中国人の思考様式はこうなっている、という研究がいったいどのような意義を有しているかを考えれば、その問題性は一目瞭然で

す。アメリカの文学を研究することによって明らかにするのは、アメリカの文化やアメリカ人の思考様式あるいはその問題点、もしくはこれとの比較で我われ日本人の心性や日本文化の特色などというものです。けっきょく国民国家としてのまとまりや、当該国のナショナル・ヒストリーに貢献することにはならない。今やこの地球上で、数々の問題を生み出している国民国家システムを相対化し、問題の解決へ向けて歩み出すということにはならないと思います。

これは私自身の反省ですが、アジア史研究をオリエンタリズム批判として出発しました。具体的には、ミャンマーの民族解放闘争史研究とか、王国社会史研究とかをやってきたわけです。つまり、それまでの、特に欧米の理解では、ミャンマーが植民地化されたのは、停滞していて暴力的な国王による専制支配が行われ、住民は苦しんでいるという理解のもと、これからの解放は内発的な力の湧き上がりにより期待できない、我われが出て行って、その体制を崩してやる必要があるということ、外国勢力が乗り込んでいったというものでした。しかし、ミャンマーの歴史や社会を研究してみると、西欧が言うようには、停滞でも静的でも異常でも未発達でもない。彼らは彼らなりに考えて、彼らの考え方でやっていたということを明らかにする、欧米がこれを遅れているとして破壊する権利はない、などというわけば彼らの復権をめざすための研究であつたわけです。

つまり、オリエンタリズムを批判し、これを否定しようとしてきたのです。社会史の研究をすることにより、これは同時代のヨーロッパと比べて全然ひけをとらない社会がそこにあったとか、もしくはヨーロッパとは違うミャンマー独自の社会システムが出来上がっていたということを証明しようとするわけです。ところが、こうした研究がどのような意義を有していたかという、それはミャンマーのナショナル・ヒストリーに貢献するような研究になっていた

わけです。ミャンマーの人は、自分の国のことをこんなに研究してくれて、有り難うといいます。しかし問題は、日本人の私が、何故それをやるのかということになります。私はミャンマーが好きだからということになりますが、しかしこれまで述べてきたように、興味をもった、好きになった理由を深く考えず、国民国家の呪縛にかかったような研究をしている限り、大げさにいえば、新しい世の中を切り拓くための研究にはならないだろうと痛感している次第です。

IV 歴史学のゆくえ

国民国家システムが世界を覆っているなかにあつて、科学的実証的歴史学はナショナリズムや愛国心を補強するための道具になってしまっています。よほど自覚的でないかぎり、その成果は、元禄時代、儒教的な大義名分論が幅を利かす社会のなかで、忠臣蔵や義士という言葉が定説になったように、社会を成り立たせている力の作用を受けることになります。現代にあつて客観的、中立的というのは、国粹主義的、民族主義的といっているのと同様であるというのはいい過ぎでしょうか。

外国史研究も例外ではありません。今般文学部に、世界史学専攻を立ち上げたのは、こうした呪縛から解放されたいと、私自身密かに考えたからです。どのような方法があるか、そしてそれがうまくいくかどうかは分かりませんが、世界史学は各国史の寄せ集めではないと、しつこくいっているのはそのためです。各国史の総和としての世界史、アジア史とヨーロッパ史、アメリカ史、アフリカ史を集めただけの世界史、ここではいろいろな国の歴史が学べるとい

うのでは、不本意このうえないことですし、もちろんそれに対応できるスタッフもおりません。

何故私たちは、フランスの勉強をするのか、フランスの文化はこうであるとか、フランス人はこうであるとか、ドイツ人はこうであるとかというような研究を何故やるのでしょうか。中国語や中国文学の研究は、中国人の思考様式や中国の文化を知るためでしょうか。それが明らかになること、そうしたものの存在を認識することの意味がどこにあるのかということまで考えてのことでしょうか。

Ⅲで述べましたように、フランスとか日本とか中国とかは、きわめて便宜的なくくりで、国土は目に見えるかもしれませんが、民族とか文化に実体があるわけではありません。ここ二百年ぐらいの間に、国民国家の凝固剤とするため、いろいろな言葉を使って歴史や文化を実体化すべく作業が進められてきたわけで、文化や歴史は観察する人によって、それは極端に言えば、どのようにも表現できるものです。西欧が覇権を有していた時代は、彼らの言葉によって世界が切り取られ、これが特権化されていたのです。

ギリシャ史とかスペインの文化という捉え方は、国民国家的な思考様式であるとした場合、では他にどのような方法があるのでしょうか。つまり国民国家的思考にとらわれない歴史学とはどのようなものか。大げさな言い方をすれば、国民国家システムが、その矛盾を露呈し、綻びはじめた現在、未来へ向けての歴史学というのは存在しうるのでしょうか。

最近、グローバル・ヒストリーということが、唱えられるようになってきました。ここ数年、ぼつぼつと文献が出版されています。従来のヨーロッパ中心史観を排し、世界各地の動きを同等に評価し、地球世界がこれまでどのような歩んできたかを明らかにしようというものです。しかし、いまだその多くは、確かに鳥瞰的に世界の歴史を眺めよう

としていますが、どうしても各国史に回収されてしまうような叙述になっているように思えてなりません。

ただそうした中で最新のといってもよいと思いますが、羽田正という先生の、『新しい世界史へー地球市民のための構想』という本は、新書版ですが、これまでとは一味ちがいます。今いったような考え方、つまり自分の国のための歴史であるとか、自民族のための歴史であるとかいうのではありません。いろんな問題が起きてしまう。だから、この先生がいうには、地球市民意識を持ちうるような歴史叙述をやるべきである。高校で教える世界史というは、あればけっこうヨーロッパを中心においた歴史で、そうではなく、中心・周辺という考え方をせず、世界の各地域を横並びにしてこれを比較する。比較という場合、これまでは違いを明らかにするためにこれをおこなってきた。それはそれぞれの特徴を際立たせるためであった。日本はこうであるが、フランスはこうであるとか、中国はこうであるとか。つまり、比較文学とかいっても、それぞれの特色を出すような形の比較にしかすぎなかったというわけです。たしかに自己の優越性や独自性を再確認することにしかならず、築かれた壁はなくなりません。

そうではなく、羽田先生のいう比較は、差異を描き出すのではなくて、共通点を見つけるためものです。これまで違った道を進み、いろいろな知恵を生み出してきたと考えられてきた世界の各地を横並びにおき、等閑視されてきた事例を丹念に拾い上げ、そこには多くの共通点があることを明らかにしていく。違う姿をし、そこには優劣があると考えられていたものが、その内実は同じものであることがわかるというわけです。こうして世界の歴史を描いていけば、それぞれの地域の人たちは、相互に関連し一体となって進んできた歴史を共有するようになり、ここに地球市民であるという意識が醸成されるということです。

羽田先生の「世界史」も、構想段階で、いまだひとつの世界史像が提示されているというわけではありません。こ

うした手法で進めていく姿勢が大切ということです。ただこの場合でも、地域ごとの歴史は描かれるわけで、確かに国民国家の枠は取り払われ、それから一步外側に広がりはしますが、それでも地域が区分され、ひとつのまとまりとしてとらえられると、やはり中心とか周縁という問題は残るのではないのでしょうか。

これで現代世界における歴史認識の問題が、克服できるかどうか心もとないところです。非常に斬新な考え方だと思いますが、よくよく読んでみると、国民国家的な視点つまり発展史観を相対化するという視点が希薄であるという印象を強くします。国民国家と歴史学の関係を、そしてその呪縛を強く意識されていないからではないかと思えます。つまり歴史というものは、過去から現代、そして未来に向かって流れているという認識のともに、その姿を源流から明らかにするのが歴史学の使命であると考えられておられるようです。

しかし新しい世界史というのは、国家の歴史、民族の歴史、そしてこれに回収されてしまう地域の歴史という考え方をどのように克服するかということではないでしょうか。私が考えますのは、民族とか国家とか、地域とか、地球とかの「過去から現在にいたる」歴史というのではなく、今我われが身を置く現代社会のさししまった問題、例えば環境、雇用、医療、福祉、格差、民族対立などから問題を解き起こし、それを解決するために過去に目を向ける。つまり過去からずっと繋がってきた人類の歴史を明らかにするという考え方ではなく、現代社会が抱える問題の解決策をみつけるための歴史学とするということです。

歴史というのは流れているのではなく、現在から過去を振り返ったときに、そこに姿をあらわすものであるとよく言われます。ベンヤミンのいう、歴史の天使です。つまり歴史には実体がないわけで、現在の要請に従って、過去が構成されていくわけです。国民国家の時代にあつては、当該国家とこれが作り出した民族の正統性を他に向かって主張

するため、過去が紡ぎだされてきました。そして近代歴史学は、こうした意図を覆い隠すため、科学的実証的客観的というペールを用意したのです。

ここでは原点にもどり、何のための歴史かということ、その目的次第でいろいろな歴史が姿をあらわすということに自覚的であるべきだと思います。人それぞれ、過去に目を向ける目的は違うと思います。私の場合、民族差別つまり民族の問題がどうしても気になります。これは大学生になった時から強く意識せざるをえない状況に投げ込まれたからです。そういう意味で、これは個人的な問題といってよいかも知れません。しかしよく考えてみますと、私の中に渦巻くどす黒い矛盾は、家族や社会との関係のなかで生み出されたもので、ある意味自分の問題ではあるが、それは現代社会の問題でもあるわけです。西川長夫先生も「民族は近代世界の想像力が生み出した最も魅力的でもっとも危険な怪物である」と指摘されておられます。

民族という概念は、国民国家の出現とともに出来上がったパラダイムであることは、有名な『想像の共同体』でアンダーソンによって解き明かされています。しかし今でもこうした理解を、奇異に感じられる人は少なくありません。民族というのは、身体的形質であるとか、言語、風俗、信仰、血縁などで、根源的に決定されるもので、ある意味人間にとって先天的属性のようなものである。誰が見ても日本人と中国人の違いは明らかで、それぞれが個々に存在することに疑いをさしはさむ余地はないと。

しかし現実それはそれほど単純ではありません。言語や風俗習慣が違っても同じ民族としてのアイデンティティを有している人はいるし、血縁なんてものは完全な幻想の世界の話です。血が繋がっているといっても、それを意識しなければ、親子・兄弟関係というようなものは出来上がらないわけです。血液が人間の意識に働きかけて、その行動

を制約するということは、それこそ「科学的」に否定されております。遺伝子とかDNAとかが、人間の思考様式をコントロールしているという話しもきいたことがあります。

それは想像の世界のことに過ぎないのに、いやそうであればそこ、これが近代以降の社会を規定してきた。想像の産物に過ぎないもののために、これまでどれだけの血が流れてきたか。近代が作り上げたこの民族という概念の問題性を解き明かしていくために歴史学を用いる。かっこよく言えば、歴史学を民族間の「不平等な関係の告発と変革」というヒューマニズム的实践の学として機能」(ジョン・スコット)させたい。「民族」というのが人間世界を認識し、構築する際の基本概念のひとつとして、いかに機能してきたかということを、さまざまな角度から例証していくことによって、民族という考え方を相対化していく。

思考の様式、パラダイムは何かを説明するため、正統化するために作られるものです。民族(ネーション)という言葉が何のために作られたのか、また前近代も「民族」を表すような言葉があったわけですが、それはどのような機能を有していたのか。例えばカレンとかビルマとかいう言葉ありましたが、現在では、カレン人、ビルマ人というように人をつけて理解する。カレンやビルマは、何を排除し何を包摂していたのか、これがカレン人やビルマ人になると、それがどのように変わるのか。そのあたりのことを明らかにしていくということです。さしあたりは、こうしたことで進めるための歴史学でしかないと考えているとことです。

おわりに

歴史学というのは、国民国家がそのシステムをうまく機能させるため生み出した式神のようなものであると申し上げてきました。また国民国家は、二百年ほど前に生まれたということも同時に指摘しました。従って国民国家がその歴史的使命を終え、この地球上に別の形態の社会が出来上がった時には、歴史学というものも、仕事が無くなりこの世から消え去るに違いありません。歴史学によって国民国家を相対化する作業というのは、実は自分自身を無化しようとする試みであるということになります。歴史研究を歴史化するための歴史学というわけです。たぶん社会学や教育学などもそうではないかと思えます。それぞれの学が理想とする世界が構築されたときには、その学問は必要なくなっている。

だからといって研究や教育を止めるわけにはいきません。これが無用になるまで、続ける必要があります。現代社会が生み出す矛盾に呻吟しつつも、これを批判しその解消に向けての方策を模索することが、大学に与えられた使命だからです。本学建学の精神に、「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」というのがあります。この「世界文化」というのはどのような意味が込められての言葉であるのか調べたことはありませんが、「日本文化と平和への貢献」としていいところに、「舊来ノ軍国主義的、侵略主義的等ノ諸傾向ヲ一擲」せんとする意図がよくあらわれています。

本来、文化や文明という言葉の前には、地域や国など、固有の地名が付きます。豊橋の文化、三河の文化、アジアの文化、ヨーロッパの文明といった具合です。これは文明とか文化という言葉が使われるようになった経緯からして

明らかです。したがって「世界文化」、つまり地球文化というカテゴリーは、火星の文化、土星の文化に対応するものでしょう。視野を宇宙にひろげ、手垢のついたことばですが「人類みな兄弟」という精神、羽田先生流に言えば、「地球市民」という考え方に対応することばです。

豊橋の文化、三河の文化、アジアの文化とかいつていたのでは、地域間や国家間の争いは絶えない。真に平和をのぞむなら、こうした郷土意識や民族意識は捨て去る必要があります。せめて意識の上でも国民国家の枠を取り払い国際的視野に立って、つまり「地球市民」という意識のもとで物事を考えていくべきである、ということだと思っています。さしあたりは、このような意識を持った人間を、私たちは送り出していかなければならないと思います。

参考文献

- 伊東利勝編著 二〇一「ミャンマー概説」めこん。
伊東利勝 二〇一二「一八五六～五八年「カレンの反乱」のカレンについて」『愛大史学』第二二号、四五～九二頁。
イマニエル・ウォーラスティン 山下範久訳 二〇〇八『ヨーロッパの普遍主義 ―近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辭学―』明石書店 (Immanuel Wallerstein, 2006. *European Universalism: The Rhetoric of Power*. New Press)。
上野千鶴子 一九九七「記憶の政治学―国民・個人・わたし」『インパクト』一〇三、一五四～一七四頁。
ジョーン・W・スコット 荻野美穂訳 二〇〇四『増補新版 ジェンダーと歴史学』(平凡社ライブラリー 五一六) 平凡社 (旧版は一九九二年出版) (Joan Wallach Scott, 1988. *Gender and the Politics of History*. Columbia University Press)。
鈴木悦道 一九九九『新版 吉良上野介』中日新聞社。
西川長夫 二〇〇一『増補 国境の越え方―国民国家論序説』(平凡社ライブラリー 三八〇)、平凡社 (一九九二年版の増補版)。
羽田正 二〇一「新しい世界史―地球市民のための構想」(岩波新書1339)、岩波書店。
山本博文 二〇一二『これが本当の「忠臣蔵」―赤穂浪士討ち入り事件の真相』小学館。

（本稿は、二〇一二年三月三〇日、愛知大学文学部第一回「人文社会学と現代に関する研究会」での報告を文章に起こし、これを修正・加筆したものである。二〇一二年一月五日脱稿）。

